

No. 145

# 全 仏

4 / 44.



東京世田谷満願寺本堂

# 禅の理念とその実践

(下)

曹洞宗大本山永平寺

副貫主山田 霊林

## 空気と禅は同じ

皆さんは、そんなことはご承知の方は幾らでもありますし、考えるまでもないことでありますけれども、私が皆さんの前で、自分自身そうした考えをまた新たにしてみたいと思ひまして、このお話をする主題をありがたくださいたいわけであります。空気のの中に生きてだれしもいるように、だれしもがみなことごとく、生きている人は禅の中に生きておるんだということが、まず第一私が皆さんと考えてみたいことであります。

禅なんて、そんなものは禅宗でいうだけじゃないか、禅宗でなければ、禅なんていうものはやらなくたっていいんだ、またそんなものは見当もつかんようなものだ、また禅はむずかしいものだ、というようなことをおっしゃる方がありますが、それは、むずかしいといえ、ものは取り扱いは方でどんなにでもむずかしくなりますね。どんなにむずかしくもなりますけれども、現実には生きてある、生きの営みとして感ずるときには、決してむずかしいものじゃない。

たとえば、皆さんはお昼の食事をなさったわけでありまして、それがいま盛んに胃腸で消化され

つつありますが、もしおのずから働く、いわゆる生理的にいって自律神経の働きがなかったら、それよりも根本的に胃腸がなかったら、またそれを動かす動力がなかったら、幾ら何を食べたって、どうしようもないでしょう。へたに食べたら、それが中毒を起したり、いろんなことになって、そのために生きられんというようなことになってきてしまいますね。

## 消化は困難

われわれが食べれば消化をする、消化をすれば体力がつく、元気が出てくる、いろんな働きが出てくるといふことは、事実としてみれば、何でもないことじゃないかしれませんが、子供でも年寄りでもみなやっていることであります。そしてそれに対して、むずかしいの、御飯食べたが、消化させることはむずかしいな、消化というものは実にむずかしいもので、こういう作用をこういうふうにして、こういう機能で、こういう器官で、というようなことを、そんなことは、お医者さんだって平生の生活においては考えちゃおられませんか。考えたり、論じたら、めんどろなものだと思えますね。

このごろはどうか知りませんが、お医者さんぐらい何々医学博士、何々医学博士という医学の博士がたくさん出る学会はないということ、われわれ、何とかややかみ半分と言ったことがありますが、しかし、お医者さんのほうは、このふかしぎな生きの営みをしている人間を相手としてやるのですから、そのどの一部分をとって研究をしても、それがりっぱな学位論文になるほどの、偉大な働きがそこに行なわれている。いろんな機能がある。それを見定めさえすればりっぱな学位になる。だからお医者さんは学位をとるぐらいのことは、何でもないとはいふことは何でもないですけれども、しかし、それを組織立ててやる人になると、これはもう非常なものでありますね。学生時代から研究題目を選んで、何十年というほど苦労して、ようやくその結論を得るといふようなもの、結論を得たって、それは一応の結論であって、それが生きの営みの全面的なものであるものでは決してない。何億分の一にもいかないほどの研究発表でしかないわけでありまして、われわれが「生きる」という命の問題を研究しようとするぐらい、困難なことではない。今日、世界じゅうの学者が、よってたかって一生懸命で科学的な原理の研究をし、応用的な技術を学びましても、地べたからはえる草の葉一本、そこに現実にすることはできないでしょう。科学というものは、命を殺して、動かん形において、ああだこうだといってせんさくすることはしますけれども、命そのものをそこに生み出すということは、どんな進んだ科学も、命そのものをそこに生み出すということはできない。植物にしましても、いろんな研究をしている人がありますけれども、そこら

の道ばたにはえる雑草の一葉をですら、実際に自分自身の力で伸びていく、生命力をもった、自分自身を生かして、自分自身を組織して、構成して伸び上がっていく命の力というものを生み出し得る人は、ひとりもないわけでありませぬ。しかも、この宇宙には、命あるものがいっぱい、命あるものがいっぱいじゃない、大宇宙は命そのものであって、その命をほどよくお互いがいただいて、そして自分自身の命として、自分自身の命から自分の肉体を、自分の精神を、いろんなものを生み出し生み出して生存し得ているわけでありませぬ。命を感じずることはぞうさないんです。草木にも命がある、自分にも命がある、また命ある赤ん坊、命あるものはみなすくすくと、そのもの自体の何の苦勞もなく、命の發展でそのもの自体が育っていきませんが、それをつくり出すことは、人間はできないのでありますね。

### 禪の母体は呼吸

ですから、禪というものを研究するにしまして、禪というものは、話は前後しましたが、この禪というものは命のない、そこらにほうり投げられているようなものではないに、命の一つの状態を見定めて、それを禪と言っているわけでありませぬ。だから、命の営みなんてありますから、それを研究しようと思えば、これはもう生理現象を研究しようとしてもなかなか始末に負えんように、研究の対象として禪をみれば、どうしようもないほどのものであります、生まれ出た赤ん坊も禪によって生きています、よぼよぼしたもう死ぬ、老人の方々も、禪の力によって生きています、ということがいえると思えます。禪というものをそ

ういう意味から、禪の基本とでもいいましょうか。だれでも「うん、そうか、それが禪の母体か」といえるようなふうのものを見定めてみるといたしますれば、禪の母体は呼吸でありますね。われわれは呼吸をしているということさえ知らずにいるようなありさまでありますから、呼吸の状態を調整してというようなことを考えていく人は少ないと思えますが、呼吸が禪だということができる道理がありますね。

その道の偉大な人の例を一つあげてみますと、禪というものを今日のように基礎からいろいろ考究したり、親しまれたりする、非常な復興をしてくださったお方は白隠という禪師であります。白隠という禪師は、病氣することもありますが、いわゆる仏さまのお指図がそこにあるんだ、恩寵があるんだといえると思えますが、白隠禪師がもし二十三、四のころにむちゃくちゃな病氣になられなかったら、あの偉大な白隠禪師はあらわれられなかったらと思えますね。

### 生と呼吸

とにかく、白隠禪師は、臨済の修行からいえば、二十三、四でもうでき上がってしまっ、いわば一服できるといふ段階だと思えますが、そういうことを言っているのは、はなはだ失礼でありますけれども、これはいわば医学の研究者たちが、医学の研究をして、一応の学位論文が通ったというようなことになつて言うこともできると思えます。とにかく修行段階のいわゆる考案工夫、まあ、そういう専門のことはとにかくとして、一応僧侶の修行として卒業だといえるところまでいかれたときに、ガタツと健康を害して、もうどうし

ようもなくなくなってしまわれた。そのときにいろいろくふうもされたようでありませぬが、白幽という老人にまみえられたということがあるんであります。そして白幽老人にまみえ「内観法」という修行のしかたを学んだというのですが、その「内観法」というものは、禪師自身が書かれていますものを繊細にみますと、結局は呼吸法だということがいえますね。呼吸のしかただということがいえます。そうして白隠禪師は、その呼吸によって、めりめりと半年ぐらいて健康になってしまわれまして、そして猛烈な努力精進をして偉大なる功績をあらわして、死去されるときには八十四歳、二十四歳で死にそうであった人が、八十四歳までもかくしゃくとして、働きながらこの世を去るといふようなことは、これはいへんなことであります。その白隠禪師がいよいよこの世を去られるときに、まあ、出直すとすればしばらくのお別れをする、そのことは、しばらくでも自分の愛するもの、自分の愛する人たち、それに言いおいていきたいことをするのが、いわゆる遺言をするということでありませぬが、その遺言をするのに、白隠禪師は、みんなが集まって遺言を聞こうと一生懸命になつておるときに、起き上がってすつとすわられただけで、いつまでたつても何にもおっしゃらん。白隠の最後の遺言がいかにあるかということ、聞耳立てておつた人たちが、幾らたつても聞こえないものだから目をあいてみると、白隠禪師はもう横になつてしまつておる。そのまくらべにおつた東嶺という和尚さん、これは非常に偉大な和尚さんです。その方が「あなたたちは一体どうしたのか、いまの白隠の遺言をあなたたちは聞かなかつたのか」と言つて、その東嶺和

昭和44年4月1日

尚が白隠はどういう遺言をしたかということを一  
言にして尽くして「大吽一声」ということばを述  
べられておりますね。その前後に多少文字がつい  
ていますけれども、東嶺の言うことばのぎりぎり  
のところは、「大吽一声」でありますね。遺言と  
いうものは、その人が一生涯一番大事なものを、自  
分自身、それ自身だと思えるほどのものを言い残  
して死ぬというのが遺言というものであります  
が、それが「大吽一声」、大吽一声の一声は東嶺  
がつけたことばで、ただ「うーん」というなりさ  
れただけだということでありませぬ。この口偏に  
牛という字を書きました。「うん」という、この  
「吽」という字は、牛がうなるようにうなる  
という字でありますね。牛はどんな場合でも、実  
にゆうゆうとして、どっしりとして呼吸が乱れな  
い。そういうものが牛のうなり方でありませぬ。  
白隠は偉大な牛のようなうなり方をして、それを  
われわれへの遺言として死去された東嶺が言わ  
れたのであります。

この「うーん」とうなる、ただうなるというこ  
とでありますけれども、このうなるということ  
が、これは、専門のほうでは四通りに「吽」の字  
のよき、悪さを区分してありますが、実際は、そ  
んな四段階や五段階や百段階ではないと思いま  
すね。人間一日の間にも何千べん、何万べんとい  
うほど息をふき出すと思いますが、その息のふき出  
し方が千万無量ある。その中であって最も快適な  
といひましようか、自分自身に心もちもよし、人  
から見ても変哲がなし、いかにゆうゆうとして  
追らず、ほんとうに、ああ、吽臭だな、と思うだ  
けでも、それを思う人がすっかり生まれ変わる思  
いをするほどすばらしい「うーん」といううなり

方があるわけでありませぬ。白隠は、それこそ人  
間の一歩の、ぎりぎり決着の、人間が健康になる  
か不健康になるか、善人になるか悪人になるか、  
怠慢するか精銳するか、その境目はこの「吽」の  
一字にあるぞ、と言って示されたのが、この「う  
ーん」であるということがいえます。この「うー  
ん」といううなり方というものは、これは息です  
よね。人間は生きてる限り、吸うたり吐いたり  
しておりますが、私たちは、生きてるというこ  
とは知っていますけれども、ああ、この人は生き  
ていないのだ、というときの唯一の最後のきめ手  
というものは、呼吸をしていないことでしょう。  
うならんことあります。うなる間は生きてい  
る。その生きてると言われる間、営んでいる、  
この「うーん」といううなりが、ほんとうに純心  
であり、善美であり、たくましくあるときに、そ  
の人はほんとうに健全な生き方をしてるという  
ことがいえるわけでありませぬ。

しかも、人間のからだの器官、機能というもの  
は、私たちの心でどうすることもできませんね。  
私は心臓がどきどきしてしかたがないんだが、ど  
きどきしないようにしたいなんて幾ら意識で思っ  
ても、どきどきしないようにするくふうはありま  
せん。ところが、呼吸だけは自分自身で調整がで  
きるのでありますね。全部調整するとはいえませ  
んけれども、息の苦しいとき、からだの苦しいと  
き、精神のもだえているときに息づかいをほどよ  
くすること、「うーん」ということをうまくやる  
ことによつて、からだも心も何もかもが一新する  
ことができますね。息を吸うたり出したりする働  
きを、意識的にできるのは呼吸だけあります。  
私は排せつ機能を完全にしたいと思うだけけれど

も、なかなかどうもうまくいかん、といったよう  
な場合に、お医者さんにもかからなければ手  
がないんであります。ところが呼吸だけは自分  
の調節で、自分のほんとうに快適な呼吸ができる  
ようになりませぬ。ふうふうといひながらも、そ  
のふうふうという一息一息に、よさがそこに感じ  
られるような、そういうことのできるのが、この  
息でありますね。この息をほんとうにうまくでき  
るようにするのが、ほんとうの禅の修行でありま  
して、それを乱雑な形でふうふういって、働き過  
ぎた馬が倒れそうになってあわふいているよう  
な、ああいう息のしかたをしなければならんよ  
うな、ほんとうの命の線につながっておりなが  
ら、命を粗末にしている人だということがいえる  
わけでありませぬ。これを私は、この「うーん」  
をやることを「吽臭」という熟語で述べること  
しておりますが、吽臭の営みをするぐらい、人間  
が生きていく上に大切なことではない。息が乱れた  
り、息が迫ったらおしまいです。息をほんとうに  
穏当にすることが、人間は非常に大事だと思いま  
すが、そういうことについてのいろいろな説明を  
したり、導きをししたりしてくださった人が白隠と  
いう人でありませぬ。

そして、白隠禪師においてそういうことをみま  
してから、ほかの禅僧といわれる方々が歴史の上  
に幾らでもいられるわけだが、一体そういう方々  
は、息づかいをどう考えておられたであろうか、  
ということをごさぐさみてみますと、私は曹洞宗の僧  
侶でありますからして研究も、道元禪師という  
人のいろいろなことを学ぶことが自分の研究題目  
でありましたから、道元禪師はこの「吽」という  
問題をどういうふう感じておられるかをみます

と、道元禪師は「仏性」という、仏の本性ということばを——「仏性」ということは、仏教からいえば一番大事なことです。仏と申し上げる方の根本の性格はどういうものか、仏さまというのは一体どういう方か、ということを見定めるのになる人でありますが、そういう書物の中で道元禪師は、師匠から「おまえはすばらしい人物になったなあ」と言ってほめられたときに、そのほめられた弟子が「ハァ」といったようなことを言っていてあいつをした。そのあいつを道元禪師は非常に尊びまして、何とこの修行者はすばらしいか、彼が「ハイッ」とこう言ったとだけいえるが、その「ハイッ」ということばの響きを味わいしめてみると、「一頭の水呉牛いできたって、うんうん」とこうあるんでありますが、この「うんうん」ということばでありますよね。一頭の水呉牛というのは牛です。水牛が放牧されて健在であるときに、いかにも満足そうに「うんうん」とうなっている、息をしている。その息ゆえに牛の目も輝き、からだのつやもあらわれて、何ともいいようのないすばらしさであるが、ちょうどそれだなあ、と言って一頭の水呉牛がうんうんとうなっている、その状況をもって禪師がその僧の偉大なる働きを礼賛している、ほめちぎっている。そこに「うんうん」とこういとは出てくることをみまして、道元禪師も「吽」ということについては苦勞なされたんだ、ということを感じたのであります。

ほかにもいろいろありますが、そしてさらにさかのほれば、釈尊のころに、釈尊はいろんな弟子方、またいろんな人々、そしてどんな人とも相

手になって、いろんな話を、導きをされておりますが、導きをさせられるときにいかなることをなされたかということばは経文に記されている。ことに禅ということばに関連する経文に記されているのを見ますと、それがよくわかりますが、いろいろ仏になっている。その中の重要な問題のところ「安般」と、こういう文学で書かれている文学があります。この「安般」というのは呼吸のことなんです。息することなんです。呼吸のことなんです。この吸うたり出したりする、この息づかいのことを、呼吸ということばは当たるのを、サンスクリットでは「アーナーパーナ」とこういうわけでありましてね。釈尊がいかに安般ということばを、呼吸ということばを、息づかいということばに重点を置かれたかが、それでも想像することができます。そしてお経文にも幾らでもあります。

### 呼吸は健全に

仏教者の修行というものの、ぎりぎりの決着は、息を整えることだ、ということばで締めくくって、その書物が何冊となくあります。それを見ましても、いかにこの息づかいというものが大切なものであるかということばは、ご想像がつくと思えますが、とにかく生まれたの赤ん坊でも、どんな年寄りでも、だれでも、死ぬが死ぬまで離れることができない、われわれの息、その息のふかしぎさ、その息のふかしぎさを感じることによって、大宇宙のふかしぎさ、仏の恩徳のふかしぎさを感じて、そして仏の父の姿を、仏さまのほんとうのありがたさを、しみじみと自分たちが身にしみて受け取るのには、この息の偉大さにしみじみと心を向けて味わいしめることが、ほんとうに徹底的なもの

だと私は確信しております。ですから、命といえども、息は生きている人はだれでもやるんでありますからそのだれでもやる息をほんとうに大切にしてお互いにその息づかいを粗末にしないように自分たちの日常生活の線その息づかいで整理をしていくということが、禅に生きるということの根本的なものであります。何といいましうか、禅のお話をするのに、そしてその禅の理念というように、禅というものは息づかいに基盤がある、息づかいがしっかりしていると、からだもきちんとなってきますし心もきちんとなってきますし、すべて人間のからだも身も健康な状態に持続されるという、その人間のからだも心も健康に持続される一番の底力は呼吸にあるということばは、これはだれだれでもこれを無視することはできないと思えます。そのだれでも無視することのできない呼吸に深く心を向けて、そして、その呼吸のほんとうのふかしぎさ、呼吸の偉大なる働き、その呼吸の健全なときに、知恵もさわやかになってくれば、いつくしみ、いたわり心も順当になってくれば、意思も健在になってくるといふ事実を深く味わいしめて、そこからだんだん自分自身の健在であることに努力をするということばを考へることが、いわば禅の基盤だ。そしてまた実践とありますが、実践もいろいろな方面からいろいろに、それがこそ千万無量に説くべきであると思えますが、何と説いても、その基準は「命あってのものだね」と午前中の講義にもおっしゃった方がありますが、命を健在ならしめていかなければ、いかなるものも実践にはならない。この命を、この命のふかしぎさをありがたくちょうだいして、そしてその命がすこやかであるようにと努力をしてい

く。それがいわば禅というものの理想であり、志念——理念ということばはいろいろにいえます。理想であり志念であります。志、念慮であります。理想というとは偉大な理想であればあるほど、向こうのほうに行ってしまう、偉大なものという感じがします。感じばかりじゃない、事実、仏教教学を見ましても、天台、華嚴というような教学のその距離は、理想的境地というものは、もう三位百大劫の修行をしても到達できないほど、あなたに行ってしまうですが、しかし、志念というものは自分自身の志であります。心の向きであります。心の向きを始終念じ詰めていることが志念であります。理想をいかに偉大にかかえても、それを遠く離してしまっておいたら、それに近づいていくことはできません。一步一步足を踏み出すものは志念であります。志、念慮であります。理想をいって志念を忘れておいたら、これは全く、むだごとじゃありませんけれども、実現は容易ならんことでもありますね。高い理想を抱きつつ、現実の自分自身がいかにもにくい姿であろうとも、いかに貧弱なものであろうとも、自分は自分なりの志を立てて、それを常に念じて忘れずに、それに基準を置いて歩みを進めていく、生活を進めていくということがなければならぬわけでありませぬ。

「理想と志念」その理想であり、志念とすべきところのものは呼吸をどんなにでも偉大な、すばらしい教学に組織することもできますね。そしてまた、その志念の志のほうは、どんなみにくい自分を、とり乱した場合にあってでも、自分自身というものを感得するほどの余裕があるところに、自分の志というものは、そこに立てることが

できます。理想と志念とを、その二道を禅の基盤であるところの呼吸というものにしっかりと味わいしめていくことが、禅に親しむものの、禅に親しむというて、ほんとうは、親しまんものではないわけでありませぬ。呼吸のない人間がないと同じように。これはだれでも呼吸がある。そこには——もう少しそこをちょっと説明させていただきますと、呼吸の渋りに禅だなあというものが出てくるわけなんです。その禅だなあという、禅というものを簡単に、素朴なことばで解釈してあるお経文によりますと、「禅というものは、静かに座して、そして思惟する」静かにすわって静かに考えるところということ、考えるといいますが、この考えは、今日の科学的な考え方とは違って、味わいしめる、思いしめることであります。静かにすわって、じいーっとそれを味わいしめる。禅というものは静かにすわって味わいしめる。そのいかにも静かな、いかにもすわりきれているような、そういうムードのあるところ、それが禅味の横溢しているところだといえることがいえませぬ。

### (禅と茶)

この「禅」という宗教的な修行を世俗の営みにもっているものの中で、一番禅というものの味わいを味わい得ることのできるようになっていっているのは茶だと思えますが、よく「茶禅一致」というようなことをいいますが、茶は和、敬、清、寂の四つの徳目を備えている。それが大事だということを書いておられますが、実際、こう静かにすわった、実感にひたりながら、静かに心のもちを味わいしめているところには、おのずからなごやかさが出てきますね。「敬」はつつましいという字

でありますね。無遠慮でないということでありませぬ。つつましい気持ちが出てくる。そうして清浄な、きれいな、統潔な感じが漂うてきますね。そしてその静かでありませぬ。和敬統寂のあるところ、そこに禅があるといえますが、われわれが呼吸をしていることは、禅の修行でありますけれども、それが粗雑であるところには、そこには和敬清寂がない。呼吸をしながら自分自身になごやかさが感じられ、つつまじさが感じられ、清潔さが感じられ、もの静けさが感ぜられるときに、自分も禅味を味わい得ているな、ということができると思えます。自分がだんだんそういうふうになりますと、いかなるものの中にも和敬清寂が感じられてくるようになる。禅味が感じられるようになってきまして、そして、何もかもに禅があるということがいえるようになりますが、そこで何もかも禅だということになったときに、はっきりさせなければならぬのは理念でありますね。何もかも禅ではあるけれども、何もかもでいいわけではないので、こういうふうに行くことがほんとうに理想である。こういうふうに行くように、志念しなければならぬということが出てくるわけでありませぬ。それは、もう時間がなくてやめなければなりません、人間はだれでも自分自身に出發するがいいんでありますね。自己主義じゃしかたがないよ、といえますけれども、利己主義でも、とにかく出發するものは、自分自身の上に出発させないと、それはなかなかできなくなりませぬ。

それで、道元禪師という人は、やはり自己という言葉を非常に大切なものと見定めつけまわして、自己をとということ深く味わいしめ、修行し

ながら、それがだんだん深まるに従って、ほかの人を見た場合に、自己、他己、他人ということばではなく、他己ということばでいなければならぬ心境になられておりますね。そしてこの全宇宙を見た場合に、全宇宙が自分自身として感じられる、うぬぼれではなしに、自分自身の親しさ、自分自身のつましきで感じられてくるわけでありませぬ。自己、他己、全自己ということばを始終言われております。自分自身をほんとうに大切に、自分自身の禅定の味わい、禅味を味わってるときに、だんだんそれが順熟してきて、そしてあらゆるものがおのれみずからの手足のように、手足という下のようにみえるかしれません、そうではなしに、何もかもが自分自身のものとしてとうとべる、そういう気持ちになる。そして全宇宙を見た場合に、全宇宙が自分自身だという、これもうぬぼれではなしに最大級の尊敬の情をささげつつ、他人ではない、ほんとうに自分自身とうとい姿だと感ぜられるようになることが、ほんとうに理想であり、志念であるというふうに述べられておりますね。それにも専門のことばで述べられておりますが、時間がありませんから、そういうことはやめまして、非常にとりまじめのつかないようなお話になりましたが、与えていただいた「禅」ということを問題にして、その理念、その実際、その実際の禅という、いわゆる禅の宗派で實際やるべきことは、こういう個条に分けてみると、ほんとうに大切なものであることがわかる。

たとえば、臨済宗の何々禅師は、これの中のこのところに非常な重要さを感じておられる。道元禅師は、この条項の中のこれに非常な意味を感じておられる、というようなくあいに、すべてを総括して、その中へ割りつけて、禅の実際はこういうもので、こういう方はこれによられて、というようなふうのことが述べられる、述べなければならぬわけでありませぬ、そういういとまがなく、これで時間過ぎてしまいましたことを申しわけありませんが、まあ、皆さんとともに深く努力したいと思っておりますことは、われわれは仏の中に生かされて生きているんだ、そうして、仏はもう何をせよとも、穏やかにそれをながめておってください、そういう寛容なお方であるけれども、しかしながら、こっちがとり乱していると、いざというときに、やるせない、どたんばに追い詰められてしまつて、どうしようもなく。そういうふうの安心もなくなることをために、こういうふうの安心を得なければいかん、死はこういうふうに見定めなければならん、それには一番呼吸というものについての見定めをしなければいかん。そしてさらにその呼吸のもとであるところの命というものについての絶対の信頼をもつようにしないと、人間はうろたえるときがあるから、それを十分反省しなさい。まあ、そういうふうの示しをされているんだということを、非常に大ざっぱでありますけれども、申し述べさせていただいたつもりであります、話はここまでにさせていただきます。ほんとうにありがとうございました。

(完)

全日本  
仏教会  
推せん

# 法名用字範

筆者 中村 素堂

B 5 版 / 250 頁 / 多色刷 /  
附録・墓誌一塔婆一念仏・題目その他 /1500 円  
〒 120全国書店発売  
(取りよせるよう指示して下さい。)仏教  
書林 中山書房東京都文京区湯島 2-14-4  
TEL 633-7676・振替東京180328

テーマ「仏教は人生の指針なり」マレーシア連邦クアラルンプール市で開催される第九回世界仏教徒会議に出席する日本代表団（下に掲載）が決った。期間は四月十三日から二十日までの八日間。参加国は、カナダ、中華民国、インド、日本、マレーシア、タイ、アメリカ、ソ連の八カ国五十六WFB支部。尚、日程次の通り。

四月十二日デリーゲート並びにオプザパー登録。常任理事会。実行委員会。四月十三日開会式、会長、組織委員長あいさつ。昼食パーティ。各国元首、首相メッセージ、実行委員会の報告、各種委員会委員長選出、各地区センターの報告、歓迎レセプション、民族舞踊。

四月十四日各種委員会（分科会）講演。

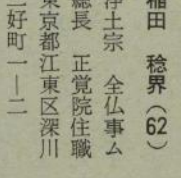
# 議 会 徒 教

## 日本代表団決る

四月十 四日各種委員会、講演。  
四月十 六日比丘供養式。  
四月十 八日総会、各種委員会からの報告、懇親会。  
四月十 九日閉会式。  
四月二 十日園遊会、さよ



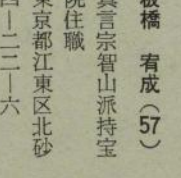
来馬 道断 (99)  
曹洞宗 全仏理事  
長 高岩寺住職  
東京都豊島区巢鴨  
二一二三



稲田 稔界 (62)  
浄土宗 全仏事ム  
総長 正覚院住職  
東京都江東区深川  
三好町一一二



板橋 宥成 (57)  
真言宗智山派持宝  
院住職  
東京都江東区北砂  
四一二一六



井坂 信興 (47)  
真言宗豊山派 全  
仏国際専門委員  
長 楽寺住職 東京  
都日野市程久保四  
〇五



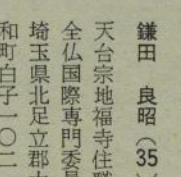
稲垣 敏 (51)  
真宗大谷派善久寺  
住職 京都市下京  
区河原町通り七条  
上ル二丁目万屋町  
三四二



鎌田 良昭 (35)  
天台宗地福寺住職  
全仏国際専門委員  
埼玉県北足立郡大  
和町白子一〇二二



河原 とし (59)  
真言宗智山派長遠  
寺内  
東京都大田区南馬  
込互一一一〇



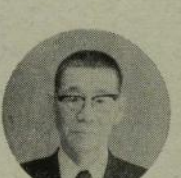
来馬 秋子 (56)  
全日本仏教婦人連  
盟監事  
東京都豊島区巢鴨  
二一二三



田中 定完 (46)  
真言宗智山派密藏  
院住職 東京都大  
田区田園調布一一  
二四一四



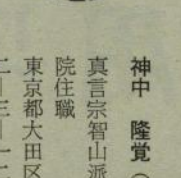
大森芳一郎 (48)  
真宗大谷派真浄寺  
信徒 みとよ商会  
社長 東京都文京区  
向丘二一三一一二



佐藤 隆恩 (69)  
真言宗智山派円能  
寺住職  
川崎市小田一一一  
六七



神中 隆覚 (71)  
真言宗智山派花光  
院住職  
東京都大田区矢口  
二一三一一二



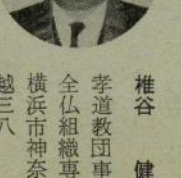
杉谷 義純 (27)  
天台宗円珠院住職  
全日本仏教青年会  
理事 東京都台  
東区上野桜木一一  
五一三



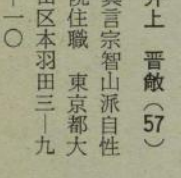
来馬 民恵 (22)  
共立女子大学生  
東京都豊島区巢鴨  
二一二三



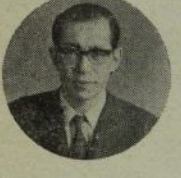
五島 宗宣 (69)  
真宗大谷派浄行寺  
住職  
東京都世田谷区東  
玉川二一三〇一三



椎谷 健 (64)  
孝道教団事務長  
全仏組織専門委員  
横浜市神奈川区島  
越三八



井上 晋敏 (57)  
真言宗智山派自性  
院住職 東京都大  
田区本羽田三一九  
一〇



来馬 民恵 (22)  
共立女子大学生  
東京都豊島区巢鴨  
二一二三



田中 定完 (46)  
真言宗智山派密藏  
院住職 東京都大  
田区田園調布一一  
二四一四



杉谷 義純 (27)  
天台宗円珠院住職  
全日本仏教青年会  
理事 東京都台  
東区上野桜木一一  
五一三

# 世界仏 マレイシア大会 第九回

井上晋敬、大森芳一郎、金倉儀一、河原とし、来馬秋子、来馬民恵、五島宗宣、佐藤隆恩、神中隆寛、田中定完、寺田康順、奈良賢太郎、内藤隆敏、内藤絹江、西村よし、半田孝淳、間野敬重、宮崎良勇、茂木隆広、山内隆敏、椎谷健、若月正真、布村哲哉の各氏。事務局長に、近藤隆敏、阿部頭瑞、真柄真雄、飯田隆妙の各氏。尚、中山理々氏は本部よりゲストとして招待されている。  
本団は十一月に出発し、大会の余暇を見て各地で戦没者慰霊法要を執行することになっている。

うならバ  
ーティ。  
四月二  
十一日解  
散各自帰  
国。

日本代  
表団の構  
人は、デ  
リケート  
に来馬道  
断、稲田  
稔界、オ  
ブザーバ  
ーに、鎌  
田良昭、  
杉谷義  
純、井坂  
信興、板  
橋有成、  
稲垣敏、



寺田 康順(50)  
真言大谷派真淨寺  
住職 全仏国際専  
門委員 東京都文  
京区向丘二二六  
一九

奈良賢太郎(32)  
妙宗公論主幹  
横浜市港北区樽町  
三三八



内藤 隆敏(61)  
真言宗智山派真福  
寺住職 東京都世  
田ヶ谷区玉川用賀  
町二一三八七

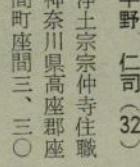
内藤 絹江(50)  
真言宗智山派真福  
寺内 東京都世田  
ヶ谷区玉川用賀町  
二一三八七



西村 よし(57)  
真言宗智山派真福  
寺婦人会長  
東京都港区芝平  
町三三



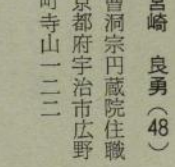
半田 孝淳(51)  
天台宗常楽寺住職  
長野県仏事務局長  
長野県小県郡塩田  
町別所二三四七



平野 仁司(32)  
浄土宗宗仲寺住職  
神奈川県高座郡座  
間町座間三、三〇



宮崎 良勇(48)  
曹洞宗田蔵院住職  
京都府宇治市広野  
町寺山一二二



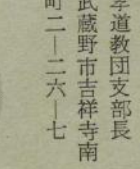
間野 敬重(67)  
真言大谷派本伝寺  
住職 全仏理事  
大阪府大東市三住  
町一〇一一〇



山内 隆敏(48)  
真言宗智山派金藏  
院住職  
横浜市神奈川区東  
神奈川三



河村 栄三(59)  
孝道教団支部長  
武蔵野市吉祥寺南  
町二二二六―七



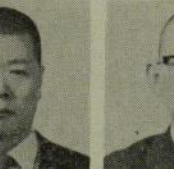
河村 信子(54)  
孝道教団信徒  
武蔵野市吉祥寺南  
町二二二六―七



村瀬 信行(27)  
曹洞宗清涼寺住職  
滋賀県彦根市古沢  
町



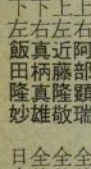
茂木 隆広(50)  
真言宗智山派増明  
院住職  
東京都大田区鶴ノ  
木一―一五―五



布村 哲哉(37)  
浄土宗専念寺住職  
東京都新宿区東大  
久保二―二四六



上右阿部頭瑞  
全仏総務部長  
全仏国際局長  
全仏国際局長  
日本交通公社添乗員



下左飯田隆妙  
全仏国際局長  
全仏国際局長  
日本交通公社添乗員

### 新潟県仏教会再発足

新潟県仏教会(長安藤寿雄師)では、新しい組織による実動態勢に入るため、去る三月十日長岡市平安閣で、その結成式を開催し、次の点につき協議、結束を深めた。

会則審議 新潟市仏教会土田真也師の座長で決定し、三月十日より実施。会則別掲。

役員選出 選考委員六名で選考その前に安藤会長(辞意表明)結果は、

会長に安藤寿雄師、副会長に土田真也師、同井上憲司師、同岡観容師を選出した。安藤会長は全仏役員任期満了と共に退任したい旨の発言。

事業・予算 別に理事会で決定することとなった。

尚、全仏より柳了堅組織部長が出席し挨拶した。

#### 会則

第一条 この会は新潟県仏教会という。

第二条 この会の事務所は会長



### 寺のお紙表

真言宗智山派 致航山満願寺。 文明二年(一四七〇)、吉良氏によって開基され、開山は定栄和尚、本尊は大日如来である江戸時代には朱印寺領十三石が与えられていた。

現在の新は、本堂去る十二

宅に置く。但し、理事会の承認を経て他に置くことが出来る。

第三条 この会は仏教の本義に基き教化活動を活潑に展開し、道義にもとづく文化日本建設と世界平和の確立に貢献し、併せて加盟団体相互の親睦と連絡提携を目的とする。

第四条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1 加盟団体相互の連絡提携および親睦

2 仏教化活動の総合的計画および促進諸

3 官庁および関係諸団体との連絡

4 全日本仏教徒会議への参加および協力

5 その他目的を達成するために必要な事業

第五条 この会は、この会の目的に賛同し、その事業に協力する各都市の仏教会を加盟団体とする。この会に加盟しようとするときは、理事会の承

月に亡くなられた満願寺第二十五世住職阿部龍伝大和上によって建立された。

様式は、全く新しいもので満願寺様式ともいうべき建て方で、本堂・庫裡とも同じである。総工費二億四千万円で清水建設。設計者は吉田五十八氏。東京都世田谷区玉川等々力町二二六一。住職阿部龍文師。

認を受けないければならない。

第六条 この会の加盟団体は理事会の議決を経て、別に定めるところにより負担金を納入するものとする。

第七条 この会に会長一名および副会長二名をおく。

第八条 会長および副会長は理事会の議決を経た者を推戴する。副会長は会長を補佐、会長に事故あるときはその職位を代理する。

会長および副会長の任期は二年とし、重任を妨げない。

第九条 この会に次の役員をおく。

常任理事 若干名  
理事 若干名  
監事 若干名

第十条 理事は各都市仏教会長が就任する。

常任理事および監事は理事のうちから会長が委嘱する。

第十一条 この会の役員は任期は二年とし、重任を妨げない。役員はその任期満了後でも、後任者が就任する時まで、なお、その職務を行う。

補充による役員は任期は、前任者の残任期間とする。

第十二条 理事会は毎年二回開催するものとし、会長が必要と認められた時は臨時に開催することができる。

第十三条 この会に顧問および参与のおのおの若干名をおくことが出来る。

顧問および参与は理事会で推

薦した者につき会長が委嘱する。

第十四条 この会の費用は、負担金、特殊寄附、事業に伴う収入をもって支弁する。

第十五条 この会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第十六条 この会の会則変更の場合には理事会の決議を経るものとする。

### 長岡市仏教会

#### 仏教徒相談室開設

長岡市仏教会(会長井上憲司師)では、第十五回全日本仏教徒(岐阜)大会で、大阪府仏教会より提案採択された「各寺院に人生相談所を設けよう」にもとづいて、市内寺院八ヶ寺で毎週水金、火木土と四ヶ寺で仏教徒相談室を設けた。人生相談、家庭問題、信仰問題、青少年問題をはじめ、すべての心配ごと、悩みごとの解決に仏教会の各エキスパートが誠心誠意仏陀の精神を基調として、緊密な連絡を保って相談に応ずることとなった。すべての相談は無料となっている。

庶務部長 真神 峻  
法務部長 伊藤 東 慎  
教学部長 小野 琢 道  
財務部長 田中 隆 恵  
宗務部長 別所 弘 因  
庶務部長 西田 演 隆  
財務部長 松平 実 禪  
宗務部長 小官 勝 憲  
所長 近藤 隆 敬  
参拝部長 木村 実 宣

天台真盛宗宗務所(五月一日付)  
宗務部長 木村 実 宣  
臨済宗建仁寺派宗務本院  
宗務部長 丹羽 徳 宗

島根仏教会事務所々在地変更  
島根県松江市寺町一・二番地(明宗寺内)  
会 長 補 賢 誓

新潟県仏教会  
会 長 安藤 寿 雄  
副会長 土田 真 也  
井上 憲 司  
岡 観 容

理事就任  
吉田 秀 映(二月付)  
山田 義 道(〃)  
宮前 鳳 洲(〃)  
味岡 良 戒(〃)  
稲葉 是 清(〃)  
佐々木 近 衛(〃)  
山田 義 道(〃)  
宮前 鳳 洲(〃)

常務理事  
就任  
山田 義 道(〃)  
宮前 鳳 洲(〃)

全仏辞令(就任)  
川尻 紀(三月付)  
田中 隆 恵(三月付)

評議員  
川尻 紀(三月付)  
田中 隆 恵(三月付)

臨済宗建仁寺派  
宗務部長 丹羽 徳 宗

法華宗本門流  
管 長 森 日 彰

臨済宗妙心寺派  
管 長 梶 浦 逸 外

管 長 梶 浦 逸 外

管 長 梶 浦 逸 外

管 長 梶 浦 逸 外

管 長 梶 浦 逸 外

昭和四十四年四月一日発行 発行人 伊藤 勝 淳 編集人 柳 了 堅

発行所財団法人 全日本仏教会 東京都中央区築地三二五(築地本願寺内)